わたしの主張2024　－第46回少年の主張秋田県大会－



最優秀賞

「私の人生」

　　北秋田市立鷹巣中学校　２年

　　　　　　　　　　中川　心紡（なかがわ　しほ）

　皆さんは、今、学校生活を楽しんでいますか。私は楽しくてたまりません。勉強も部活も行事も、大変なこともありますがとても楽しいです。

　でも、一年前は苦しくて、辛くてたまりませんでした。私は小学六年生の三学期から体調を崩し、体が自分の言うことを聞いてくれなくなりました。昨年の四月は新しく始まる中学校生活に期待して学校に行こうと頑張りました。一か月ほどはなんとか登校できていたのですが、次第に体力的にきつくなってきて、とうとう学校に行けなくなってしまいました。しばらくして、鷹中では体育祭が開かれました。体調は悪かったのですが、私は一目見たくて、見学に行きました。生憎の大雨でしたが、そんなことを全く気にもせず、クラスが一丸となって行進する姿は勇ましく、まぶしく見えました。と同時にその場に一緒にいられなかった自分のことを思うと、悔しい気持ちで一杯になりました。一人取り残されてしまうような寂しい気持ちになりました。

　だから、私はみんなと会うことが難しい状態だったけれど、どうにかしてみんなとコミュニケーションを取りたいと思うようになりました。考えた末、「手紙」にたどり着きました。私はみんなに「体育祭お疲れ様でした」という内容の手紙を送ってみました。私の勝手な自己満足だったので、とても不安でしたがクラスのみんなは手紙を返してくれました。そのときの手紙は今でも私の宝物です。その内容は、友達同士の楽しいやりとりやテストの大変さなど、何気ないクラスの雰囲気が分かるようなものでした。「学校においでよ。」という優しい言葉も書いていました。読んでいてとても楽しかったです。この手紙は私に光を与えてくれました。

　私が立ち直れるようになったもう一つのきっかけがあります。それは「ゆっくりで大丈夫だよ。」と声を掛けられたことです。そのときの私は、「早く学校に行かなきゃいけない。学校に行くのは当たり前なんだ。」と焦っていました。でも、友達、先生、家族のみんなが「ゆっくり、ゆっくりでいいんだよ。」と声を掛けてくれたのです。私はこの言葉を聞いてとても安心しました。「学校に行けないのはだめなことなんだ。」と思っていた私にも声を掛けてくれる人がいる。私はまだ大丈夫、焦らなくてもいいんだと思えてきたのです。

　私は周りの人に助けられて成長することができました。学校に行けなかったという経験は確かに辛く、苦しいものでした。でも、この経験があったからこそ、今の私がいます。私は「当たり前が当たり前ではないのだ。」ということに気付くことができたのです。今では私にこのことに気付かせてくれた貴重な体験だったのだと前向きに考えられるようになりました。

　今の私は、「たくさんのことに挑戦したい」という気持ちで一杯です。皆さんの多くは、学校に来ることが当たり前だと思っているでしょう。だから学校の楽しさや大切さに気付かなかったり、なんとなく毎日を過ごしていたりしている人もいるのではないでしょうか。私は、勉強をして分からなかったことが分かるようになることに喜びを感じます。休み時間の友達との会話にうれしさを感じます。当たり前すぎて気付かないかもしれないけれど、学校に来ているからこそ、体験できることがたくさんあるのです。この当たり前の日々を「当たり前だな。」と思い、終わらせるのではなく、この時間も大切な人生なのだと気付いてほしいのです。そして、今、一度しかないこの瞬間、ここでしかできないようなことに挑戦してみるともっと新しい未来が開けるのではないでしょうか。私は、今そんな人生を

歩んでいます。